



TITLE:

ヤクニホンザル自然群における、 ワカオスの社会関係(Ⅲ 共同利用研 究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

鈴木, 滋; 塚原, 高広

CITATION:

鈴木, 滋 ...[et al]. ヤクニホンザル自然群における、ワカオスの社会関係
(Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1989, 19: 48-48

ISSUE DATE:

1989-09-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/163932>

RIGHT:

チ。11月シマサルナシ、コバノフユイチゴ、モチノキ。12月カクレミノ。1月タイミンタチバナが出現する。9月から1月に出現するヒサカキが一番安定し、次いで1月から3月のタイミンタチバナである。量の多いのはハウロクイチゴ、ヒサカキ、タイミンタチバナであった。上、下共通種は上部域のヤクザル垂直移動の可能性を示している。種子以外については十分な検討を加えていないが、上部域で昆虫出現率が高く、繊維質が多く検出される。キノコ類の出現時期に、上、下で相違が認められる。上部で2、3月に多く、下部では4月に多く認められる。いずれも種子の非常に少ない季節であり、キノコ食がこの時期に集中する意味は今後の検討課題の一つである。

ヤクニホンザル自然群における、ワカオスの社会関係

鈴木 滋 (京大・理)
塚原高広 (東大・理)

'88年7月から8月にかけて屋久島西部海岸においてニホンザル自然群の社会学的調査を行った。

I ヒエンド群の構成

近年観察がとぎれていたヒエンド群について、その構成を確認し、人付けを回復した。また以前の調査時に作成された家系図を、オトナメスを中心として継続することができた。現在集中調査を継続中の3群のうち2群と、ヒエンド群とは隣接しており、この調査により連続5群の構成が明らかになった。これらの情報は、オスの移籍、人口学的問題、集団間関係等の、通時的、社会学的研究に不可欠な基礎資料となる。

II アルク群におけるワカオスの社会関係

アルク群のオス7頭(オトナオス4頭、ワカオス3頭)を個体追跡し、おもに敵対的交渉とグルーミングにかかわる交渉を分析した。

オス間には、直線的順位が認められ、オトナオスがワカオスより優位である。ワカオスーメス間では優劣が不明瞭である。オトナオスがメスに優位表出をするのは、自分よりも優位なオスの近接しない場合だが、ワカオスは、自分よりも優位なオスが近接していても、メスに優位表出を試みる。メスはワカオスの優位表出を認めず、反撃することが多い。また、ワカオスは優位なオスの近接し

ていない状況でも、メスを避けることがある。

オスは、オスとのグルーミングよりも、メスとのグルーミングを志向する。オトナオスのグルーミングは、メスが相手のものがほとんどを占め、かつメスの接近でグルーミングが始まり、オスの退去で終わる場合が少なくない。それに対して、ワカオスは、メスとグルーミングをかわすことは少なく、しかも、ワカオスの方から積極的にメスに接近してグルーミングし、メスの退去で終わることが圧倒的に多い。

以上の結果から考察すると、社会的に未成熟なワカオスは、その未熟さゆえに、メスからオトナオスとは区別して扱われることが多く、またみずからそういう状況におちいる傾向が強い。その結果、ワカオスは、基本的には群れの一員としてのステータスを志向しつつも、つきあう相手を限定されることになり、社会構造上の“周縁部”に位置することになるのだろう。

課 題 6

聴性脳幹反応による霊長類の聴力曲線の作成と直接電氣的記録との比較

鎌田 勉・亀田和夫(北大・歯・生理)

反応時間測定による行動学的な聴力曲線をとると、ニホンザル(およびチンパンジー)では、2および8kHzの間の周波数の音に対して閾値が低い部分が生じ、いわゆるW字型の曲線となる。これを電気生理学的に検証するために、聴性脳幹反応(ABR)、蝸牛マイクロホン電位(CM)、複合活動電位(AP)を記録して閾値を求めようとした。ニホンザル延べ5頭からABR、CMまたはAPを、日本光電社製Neuropack IIを使用して記録した。ABRはヒトに準じて頭頂・耳だ間の電位を2048回加算して得た。CM、APは銀ボール電極を鼓膜の近くに電極のりで固定し、それぞれ128回、または512回加算して得た。ニホンザル1頭について直接、CM、APを正円窓に銀ボール電極を置いて記録することを試みた。これは術中、耳小骨を破損して正確なデータを得ることができなかった。

ABRの結果は1、2、4、6、8kHzでの閾値が8回測定の平均で58.7、44.4、49.4、54.4、41.9dB SPLであった。このように閾値は8kHzで